



2012年2月にステップスギャラリーで開催されたレクチャーウィークに私も参加した。その際にオーナーの吉岡まさみさんからお奨めのアーティストを紹介して下さいと言われた際、私は迷わず間島秀徳を推薦した。間島は教え方が絶妙に巧い。ということは、トークでも充分な力を発揮する。当時、鎌倉の日本画塾が潰え、間島は美学校講師を控えていた。日本画という曖昧模糊な世界の中に、無所属で、更に抽象に見える作品をアクリルまで用いて制作する間島は、活動当初から今日に至るまで、一貫した姿勢を保っている。予想通り多くの来客の中、無事トークを終えた間島が、ステップスギャラリー一周年に展覧会を開催することは、単なる偶然では決してないと私は思っている。

間島は今回、ギャラリー内にたった一点の作品《Kinesis No.511 (requiem)》を展示した。150号サイズのパネル四枚組で、和紙、岩絵具、大理石、溶岩、アクリルといった、間島がKinesisシリーズで常に使用している素材に代わりはない。

作品の副タイトルに「レクイエム」の文字が見えるが、間島は震災後直ぐにその想いを込めた作品を制作、横浜で発表している。今回の作品から海を想起することに間違いはないだろうが、間島の言うレクイエムは自らも被災した震災に対する、単なる鎮魂の域を通り越している。

三層に横に伸びる図像、この内容も重要視すべきではあるのだが、今回、最も重要なのは、宙に浮く屏風という形態にあると感じた。ギャラリー一杯どころか収まらないので左右を曲げた訳では決してない。間島は地に付く屏風どころか、円柱の作品まで制作している。我々は垂直に対して深い憧れを持ち、空を飛ぶことを夢見ている。その願望を保持しながら、我々は間島の作品を見て水平に歩むのである。その視線の底に果てしないESが沈んでいることを前提として。その果てに辿り付くことを恐れずに。

